

小さな「怪獣たち」とのドラマセラピー

6. アンズちゃんの成長

尾上 明代

このマガジンでは、A 児童養護施設で継続的に行ったドラマセラピー治療の事例を連載してきた。ドラマセラピーには多くの手法があるが、ここでは、いくつかのドラマゲームや即興劇手法を使って実施した、小さな「怪獣たち」（イチゴちゃん、リンゴちゃん、アンズちゃん、マツオ君、スギオ君）とのプロセスを詳しく提示している。（各子どもの家庭状況と合わせて、その子どもの即興ドラマを考察すると、その意味がより良く理解できるのだが、それらの記述は割愛する。）

前号では、子どもたちとのプロセスがさらに進化する一方で浮上してきたセッション内での多くの「性的」な言動について記述した。その後も名残のように、同じような言動が散見されたものの、その頻度は予想をはるかに下回り、全体的に収束の方向へ向かっていったので、これはどういうことかと考えていた。その言動へのこだわりが最も強く感じられていたのが、アンズであったが、その収束傾向と、まるで反比例するかのように、ドラマをどんどん演じ始めたのも、またアンズであった。彼女は、当初もっともドラマを演じたがらない子どもだった。それでも少しずつ、仲間に紛れ

るようにして全員で演じるドラマには参加していた。その後、私と二人で創るドラマには、やっと参加してくれたものの、黙って寝ているだけの隣人の設定で、ドラマの中での関係性は作れていなかったのだ。

* * *

第10回セッション

アンズの変化

この日は、まずパントマイムでいくつかの状況を浩二さん（施設の職員）と私とで演じて見せ、誰がどんな気持ちで何をしている場面かを子どもたちに当ててもらった。このゲームは初めての試みである。

その後、それぞれ二人組でアイデアを出して場面を演じ、当てっこをした。内容は、吠えている犬と飼い主、町で痙攣を起こした人、などシンプルなものが多かったが、彼らは、内緒の打ち合わせ・演技・当てっこ、というプロセスすべてをととても楽しんでた。特にアンズが私と二人組みで、まともに演じてくれたのは、このときが初めてだったと思う。コンビニで万引きする場面を本人が提案して上手に演じた。

その後、昔話の登場人物を組み合わせ使ったドラマでも、桃太郎になったアンズ

は、おばあさん（私）としっかりコミュニケーションをとることができた。まだまだ抵抗したい気持ちもあり、「うるせーなー！」などと表面では言いながらも、嬉しそうに「おばあさん」と会話をした。おばあさんを助けるような言動も見られ、初めて私たち二人のドラマが成立したように感じる。

家族ドラマの進化

そのまま、自然に5人きょうだいのドラマに入ってしまった。子どもたちが夜中まで寝ないで起きているので、母親（私）が怒るところから始まった。

翌朝、「起きなさい！」と母親がいうと、寝不足の子どもたちは「眠い、うるせー！」と反抗する。眠そうな演技が、みんなとても上手で、その上達ぶりに驚く。演じることに抵抗があるスギオも、全員一緒のドラマだと積極的に参加するようになったのも、良いことだ。

子どもたちは登校して学校の先生（私が兼役）に、母を悪い人に仕立てて言いつけ、家に帰ってまた母に反抗する。面白いのは、ドラマの最中、みんなが口々に「こう言うの！」というふうに、私のセリフや筋を命令するので、私は言われたとおりにドラマを創っていく形になっていることだ。「もっと怖くして！！！」とリンゴに怒鳴られ、私はもっと怖く怒る。

この連続セッションが始まる前に、お試しセッションをしたとき、子どもたちは「超怖いお母さん」とか、「世界一怖いお母さん」になってほしいと私にリクエストし、私が（様子を見ながら）言われたとおりの怖い母親を演じて、彼らは、それに対峙して

反抗することができなかった。しかし、このごろの彼らは、自分の身体と声を使ってしっかり感情を出して「母親」に対峙している。

アンズも母にいろいろ訴える。でも母への怒りではなくて、学校で怒られたことを私に言いつけたりして、結局は甘えているようだ。何も表現してくれなかった初期のころのアンズとは、まったく違う。他の子どもたちも、みんなで口々に私にいろいろな文句を言っているが、そのことで、母とコミュニケーションをとっている様子である。

結局浩二さんが父親になる。彼は穏やかで良い父親を演じてくれた。

「そうか、そうか、君たちは元気があり余ってるんだね。」

その後、母親の私一人をおいて、父親と子どもみんなが家出するという提案が出た。イチゴ：みんなで家出してハワイに行こう！！

スギオ：そんなお金ないでしょ。

（ドラマの中で、現実の枠を超えるという想像力がまだ不十分なため、彼はとても現実的な意見を出す）

イチゴ：知らない人の子どもになりすまして飛行機に乗っちゃえば！？

（イチゴらしいクリエイティブな発想である）

何だかんだと言いながらも、結局、飛行機には乗らずに全員で家に帰ってくる。

父：みんなで帰ってきたよ。

母：まあ一嬉しいわ、帰ってくれて。（優しく嬉しそうに）

ここで、「最後まで母親は、良いお母さんになっちゃいけない」と子どもたちに言わ

れたので、「もう、早く寝なさい！」と怒鳴ったが、最後は私の次のせりふで、ドラマを終えた。

母：これで一家7人が揃って、あー良かった、良かった。

第11回セッション

円になる意味

施設の都合などで、前回から間が空いてしまった。もうすぐ年末で、きょうは今年最後のセッションである。子どもたちは私に会って嬉しそうだったが、同時に不満を言う。特にアンズは、「何でもっと多く来てくれないの。」と、めずらしい態度とセリフであった。私に素（す）でも甘えることができるようになったようだ。正直な自分の感情を出してきたということは、良いことだ。

いつも通りのダンスのあと、「みんな丸くなってー！」と声をかける。この子どもたちが、ちゃんと一つの円になっていられる時間は、毎回1分ももたない。

ところで、この日リングが突然、「何で丸くなるのよ？三角でもいいじゃん」と言った。これは良いアイデアだと、すぐに採用する。全員で一つの三角形になるのは、円より難しい。いつになくみんなは集中して三角を創った！

リングの問いはユニークだ。何で円になるのか？ どんなセッションでも、誰からも聞かれたことはなかった。

円という形はセラピーでとても重要な要素である。円は大部分の古代儀式と初期ギリシャ演劇の形式である山羊の踊りで使われているが、これはドラマセラピーや一般

的な心理療法グループのドラマ的儀式でもよく使う配置の形でもあるⁱ。円は強力な宗教的、精神的、心理的な象徴であり、プシュケーを反映しているⁱⁱ。さらにそれは、全体性を象徴している。つまり、時間と空間の全体性であり、出立と帰還、外に向かったの冒険と帰宅、誕生と死と復活を示しているⁱⁱⁱ。このように、円の形になることには、さまざまな象徴的な意味と意義がある。また別の象徴としては、メンバー全員の平等性や、ときには団結、結びつきもあると思う。例えば、傘連判状（一揆などで用いられた円環状の署名形式）のコンセプトは、誰が主役かを隠しつつ団結する様子を示していて、その良い例の一つだ。さらには、例えば「人格が丸くなる」というような表現に示されるように、角がない円というのは、平和な感覚、戦いやコンフリクトのない柔らかさや暖かさ、心の平静なども表現している。さきほどのリングのコメントを思い返すと、彼らがそのような「丸い」気分ではないことが理解できた。まさに「三角」の気分だったのだ。A施設以外のすべての場所で行うセッションでは、あまりに当たり前に感じていた「円になる」行為が、この子どもたちにとっては、疑問であったことを教えられた。そして、リングの提案を受け入れて楽しく三角を創って外在化できたことで、逆に彼らのその日の「角」をとることができたかもしれない。

自由な表現へ

そののち、(最近のワークの中で大ヒットの)「パントマイム当てっこ」をやったあと、子どもたちは、てんでバラバラではあるが、同時に何かをし始めた。ちょっと誰かと誰

かがドラマモードで対話になったり、勝手に叫んだり奇声を発したり。今年最後のセッションということも関係しているのかもしれないが、何かいつもと違う感じで活気づいている。

例えばイチゴは、テレビのアナウンサーになってマイクを持ち、「皆さん、イチゴニュースの時間です。明日の天気はー」などと1人でしゃべっている。するとアンズが、気持ち良さそうに歌い出す。マツオも何かわーわー言っている、というような状態だった。みんなが私に見ていてほしい様子だったので、楽しい気分ニコニコと全員を同時に見守った。

これほどまでにみんなが自発的に自由に気持ちよく、自分をそれぞれ表現しているのを見るのは初めての気がする。だから、このような時間があっても良いのだと思った。ただその状態がしばらく続いたので、少し枠組を作ろうと思い、「みんなのドラマを作ろうか、どうするか」と聞いてみた。イチゴのニュースと天気予報はまだ続いていたが、結局歌いたい女の子たちの意志が強かったので、私は紅白歌合戦を提案し、司会も私が買って出た。その部屋には三つのマイクがあったので、それを使うのも楽しかったようだ。それなりに紅組と白組の歌唱が終わると、後半は、お約束の動物園タイムとなる。

「動物園ドラマ」の意味

それぞれの「動物たち」は、椅子などを使って自分の檻を思い思いに組み立て、自分の居場所を創る。アンズは決して単体ではない。しかし、いつもは必ずリンゴと一緒に「夫婦」でいるのに、今回は初めて

「親子」だった。

朝ご飯の餌をもらったら、さっそくみんなが逃げ出す。とにかく檻から抜け出す。浩二さんと私が追いかける。みんなは追いかけるのが大好きなのだ。「麻醉銃で撃たれたら寝る」というルールは、特にマツオとスギオのお気に入りだ。でもすぐに「麻醉」は切れて、また奇声を発して暴れ、エネルギーを大いに発散する。浩二さんと私は疲れるだけなのだが・・・。一人ずつ、「ここが私たちのとこね」「じゃ、ここで逃げるの」などと主張する。結局、みんなでグランドピアノの下に入って「ここは安全地帯」とばかりに家族になって隠れて、寝たりしている。しばしの休息が得られると思い、私たちも静かにしていると、そのままではつまらない様子で、しばらくすると誰かがあえて逃亡する。イチゴやアンズは、「うー、ぎゃー！」と獐猛な動物役で私に牙を剥く。まさに「小さな怪獣たち」である。でも私が不快になるような、また悪意のあるようなネガティブな感情は感じられなかった。

浩二さんは、セッション後の私との振り返りのときに、「動物園の檻から逃げるといふドラマ」はみんなが現実（養護施設の生活）から逃げたいということではないかと言った。しかし私は、ただ逃げたいのとは違うと感じる。つまり逃げたら私と浩二さんに捕まえてほしい、つまりケアしてほしい、関心を向けてほしいということなのだ。どんなに唸っても、噛みついて、逃げても、やはり「飼育係」として自分たちをケアしてほしいのだ。もし単に現状から抜け出したいのであれば、ピアノの下に戻ってみんなで集まって寝たりしないのではないだろうか。養護施設の生活はつらいかもしれ

れないが、今は自宅に戻れないことを、彼らは知っている。仲間と一緒にいるピアノの下（養護施設）は、とりあえずの安心の場所で、そこで仮想の家族を味わっているのだろう。

お菓子を食べながらのシェアリング

セッションでエネルギーをたくさん発散したからだろう、子どもたちは落ち着いて話している。「今年11回やったよ」と言うと皆に「少ない！」と不満をぶつけられた。ドラマ外で私に気持ちを表現してくれるようになったことは、評価できる。

今日の空想の時間の中身を聞いてみると、なかなか良い返答であった。

リンゴ：えーと山を一人で散歩してる夢。

私：へー！山を一人で。（嬉しい）

マツオ：（性器にまつわるジョークを言う。）

私：ほんと。（さらっと流す）

イチゴ：南の島でイチゴ一人で昼寝してた。

私：南の島ね。

アンズ：何も見てない。

私：見てない。

スギオ：ない。

私：ない、OK！（大丈夫、という感じで）

アンズはこの日、性的な内容の発言をしなかった。（今日この話題に触れたのは、上記のマツオだけだった。）

全員、今日も動物園が面白かったと言う。よほどお気に入りのようだ。そして、今日が年内最後なので、「来年、またやる？」「いつまで？」という質問をみんながし始めた。やりたいか聞いてみると、皆は「やりたい」「やりたい」と口々に答える。アンズは、「再来年の12月まで！」と言ったが、そ

れはずっと長くやりたいという意味であると解釈した。初めのうち、ドラマを演じることに対して抵抗がかなりあり、私にもなかなか慣れなかったので、この発言は良い進歩である。

私：また来年も楽しくやろう！

イチゴ：泣いて。

スギオ：泣け！お別れなんだから。

彼も、このような表現で、自分が「今年のお別れ」を悲しいと思う気持ちを伝えようとしてくれたのではないだろうか。私は、彼のリクエスト（？）をまったく無視することはできないと思い、ちょっと泣くまねをしてから、「でもさ、今年是最後って言うだけじゃない。」と彼らに来年も必ず来ることを伝えた。このような会話を彼らとできるとは嬉しい。とても良い時間だった。

第12回セッション

ウンチが出ない「トマトちゃん」

年明け最初のこの日は、まず二人組であらかじめ打ち合わせして作ったミニドラマを発表することにした。私はアンズと組んだ。どんなことにしようかと聞くと、「何も考えてない・・・。ウンチのこと・・・。」と言うので、私がアイディアを出して相談。そのときは、結構やる気で話し合っていたが、いざ実際に発表するときには、なぜか気分が退却してしまったようだ。

私：私はニンジンの神様です。あなたは誰？

アンズ：（私が励ましてやっとなで答える）トマトちゃん。ウンチが出なくなっちゃったんだ。

私：いつから？

アンズ：生まれてから。（アンズは打ち合わ

せ通りにはせず、即興で答える。)

私：今、何歳？

アンズ：一歳。

私：生まれたときからウンチが出ないというのは、大変じゃ。良い方法を教えてあげよう。私を食べなさい。出さないと身体に悪いぞ。

アンズ：イヤだ！

私は、この短いドラマにインパクトを受けた。生まれてから一度も排泄をしていないということの中に、何か大事なことがメタファーとして現れていると思う。アンズは実際は十歳なので、それが象徴している何か、一年ではなく、実は十年続いているのではないだろうか。一歳と答えたのは、そのような年齢に戻りたいのか、またはウンチが出ない期間の答えとして一年くらいが妥当と感じたからか。いずれにしても、「イヤだ！」と言ったとき、彼女の強い拒否の感情が表出されているのを感じた。ニンジンの神様が差しのべた助けを拒否したアンズ。ニンジンを食べるのがイヤなのではなく、ウンチを出すのがイヤなのだ。ドラマの中で解決策が出ることも、ドラマの中で癒されることも拒否している・・・という感じを受ける。しかし、このドラマでアンズの中の何か揺さぶられたのではないかと思う。そしてそれは、(後日、気づいたことなのだが) このセッション後半の、初めての「アンズのドラマ」へとつながって行くことになった。

動物園

みんなが一番好きで一番やりたいのがこれなので、このところ絶対はずせない。彼らは一生懸命自分の檻を(椅子など使って)

時間をかけて作っても、すぐそれを壊し、檻から逃げる。壊すために、時間をかけてきちんと作っているのかもしれない。

今回は私の思いつきで、(サファリパークのような)動物園を見に来たお客になり、浩二さんが案内係として、私にいろんな動物を見せてくれる設定にした。たとえば、私が「この動物、檻から出てるけど、大丈夫ですか？噛みつかない？安全？」などと聞いて、彼が「大丈夫です。これはカラカルの親子で・・・」というふうに説明する。動物たちは、決してお客を歓迎しない。私に吠えたり、噛みつこうとしたり、突進したりして来た。年明け早々、またもやエネルギーがたくさん発散された。

アンズのドラマ

その後、皆で一緒に家族ドラマをやろうということになった。設定を打ち合わせるため、私が「子どもたちは私(母親)のことを好きなの？」と聞くと、アンズが首を横にふり、「ううん。私たちは、二人が仲良いところをじゃまするの。」というふうに答えた。今までも、浩二さんが父親役、私が母親役、みんなが五人きょうだいの家族のドラマを何回かやってきたが、アンズが中心になってアイデアを出したり、登場人物の設定や筋を創っていくのは初めてのことだ。

五人全員が父親の子どもで、私は最近、父親と結婚をした継母なのだそう。「どんなお母さん？」と聞くと、アンズとイチゴが私に指示をする。「きびしく、やさしい母親。子どもたちは母親のことは嫌い。」とのこと。そしてアンズは再び「仲良いところをじゃまするの」と言った。

私は、ご飯の場面から開始した。新しく来た母として、家族に宣言をする。

母：私は一生懸命、良いお母さんになるからね。(夫に) 私、あなたの子どもたちを、一生懸命愛していきます。

アンズ (以下「ア」)：お父さんだけ、愛していればいいんだよ。

(別に責めている感じでなく、淡々と語る。)

アンズが自ら主演を演じている事実が驚く。さらにはドラマの途中でどんどん指示を出してみんなを導いている。こんなことは今まで一度もなかった。間違いなくこれは、彼女のためのドラマだ。不思議なもので、いつもなら誰かが提案したことに、必ず反対意見が出るのだが、今は誰もほとんど自己主張しない。(特に男子2人は、まったく抵抗・提案しないでアンズに従っている。)彼女の不退転の気迫が、皆をそうさせているのが、わかる。重要な瞬間に立ち会っているという感覚だ！

今日は、アンズの十歳のお誕生日という設定で、二人が大きな誕生日ケーキのロウソクを吹き消す。私が切り分けてあげて、みんなで食べる。「プレゼントには何がほしい？」と聞くと、アンズは猫がほしいと言うので、ペットショップに行つて買う。

アンズ以外の4人は、途中で猫になったりもするので、子どもかペットかわからないくらいごちゃごちゃしていた。誰かがウンチしよう、ウンと言っていたり、ペットたちは奇声を発して大変な騒ぎだった。

母：お母さんと仲良く暮らそうね。

ア：イヤだー。(でも実際はそれほどイヤそ

うな雰囲気ではない。)

そして突然、

ア：離婚すれば！？ お父さんだけの方が全然いい！

と言出す。このあたりでちょうどセッションの終了時間になったのだが、最後の最後で一生懸命アンズは部屋を作り直し始めた。「お父さんとお母さんの部屋は、ここ。ここ、子どもだけの部屋。」などと椅子を使って部屋をアレンジし直している。最も個人的なのは、椅子を沢山使って玄関からずーっとぐるっと遠回りしてやっと部屋に行き着くような造りの家だったことだ。

時間が来てしまったので、いつもの想像の時間にすることを告げ、いつものオルゴール音楽をBGMとしてかける。みんなは、少し落ち着いて横になる雰囲気なので、ドラマの中から自然に出てきて、収束のための感想を言う時間に入っていけるように、私は子どもたちに語りかけた。

私：良かったねー、お誕生日祝いで。ケーキ食べて、ペット買って。

ア：あーまずかったー！

(初めて、はっきりと冗談であると自他ともにわかる言い方で、みんなも私も笑う。彼女は、さらにいろいろわざとけなしている風なことを言ったが、本気の嫌悪感のようなものは感じられなかった。

私：お父さんは良いお父さんだし、お母さんも一生懸命――

ア：(私のことばをさえぎって) お母さんは良いお母さんじゃないけど。

今日は、この先をアンズがどうしても続けたい勢いがあつた。そして、一度は収束させようとした私も、再び自然にドラマの中

に戻るような体裁になって行った。

私：もしかしてお母さんは、離婚してくれるかもよ。

ア：早くしてよ。

母：じゃあ、お父さん、離婚しよう。ね？

そうしたら皆幸せになるみたいだから、私は身をひきます。

父：そうか、仕方ないかな。

母：じゃあ、みんな元気でね。短い間だったけど。

マツオ：超短い！

母：お父さんと仲良くね。バイバーイ！
みんなが、本気で出て行けっ！という母親を拒否するような感情ではなかったこともあり、深刻な雰囲気は全く造らず、少し笑いながらいかにもお話を創っています、という感じに演じた。

ア：バイバーーイ！！

(と母に言ってから、自分で「やったあ！」という感じで) イェーイ！

(つられてマツオたちも母親にバイバーイと手を振っている)

私は、これでドラマが終わったかと思い、「すごいハッピーエンドだね。」と言った。アンズは嫌いな人がいなくなって喜ぶ子どもの役を演じたのだが、この「イェーイ！」が、何かカラ元気で、母が出ていったことを実は喜んでいないのに、無理に喜んだ演技をしている気配が感じられた。するとアンズは、すかさず続けた。

「それでね。一年後にお母さんから電話が、お父さんのところにかかってくるの。トゥルルルンって。それで私が電話に出るから。」

こんなに具体的にはっきり指示したのは

初めてだ。もうかなり時間オーバーだったが、今夜はやるしかないという状況である。どちらにしても、もうやっている！ 浩二さんも同じことを感じ、私たちはアンズのために劇を続けた。

母：トゥルルルン。

ア：(受話器をとる動作) もしもし、佐藤(浩二さんの名字) ですけど。

母：もしもし。私、一年前に離婚したお母さんですけど。みんな元気にしてる？

ア：(それには答えず、すぐに皆に大声で) みんな一聞いて！ みんなちょっと聞いてー！ あのね、お母さんから電話なんだけど！ ねー、出ていいと思う？ 出ていいと思う？ (こんなにドラマで生き生きとしたアンズは、初めて見た。)

リンゴ：思う！

ア：じゃあ、お父さん出て。(受話器を父に渡すしぐさ)

母：もしもし、あなた？ 元気にしてますか？ 離婚したけど、子どもたちのことが気になって電話しているんですけど。

(子どもたちが母親を本当に憎んでいるわけではなく、実際は未練があるのを感じて、子どもへの気持ちをセリフで表して伝えたいと思ったのだ。)

父：アンズが心配してたよ。

母：ほんと？

ア：(電話の横でお父さんに) してないよ、してない。

(直接話すところまで母を「許して」ないが、でも電話の向こうに母がいて、自分の好きな父が、今、母とコンタクトが取れている状態なのがすごく嬉しい感じだ。)

母：してないんだー。でも、もし皆がいいって言うてくれたら、別れてからも心配

だったから、皆に会いに行きたいと思っ
て。(アンズは電話に耳をつけて聞いている)

ア：(きょうだいたちに) みんなー、お母さん、来ていい！？

(彼女は中立で聞いているのはでなく、自分自身は母親に帰ってほしい感じ。)

皆：いいよー。(そのアンズの勢いに押されて、みんな一緒に即同意！)

ア：ほんとに！？

父：(電話で妻に) いいって。アンズもいいって言ってる。

ア：お母さん、帰ってきたら意地悪しよう。
(・・・などと大声で独り言を言っているが、嬉しい感じが伝わってくる。)

母：ピンポン。みんな久しぶり！(玄関で叫ぶ。)

父：(子どもたちに) 帰ってきたよ！

皆は、家の中で大騒ぎの様子。前述したようにアンズが、玄関からぐるっと長い廊下を遠回りしてやっと部屋に入れるような家に造ったので、私がみんなのいるところまで行くのに、みんなが玄関に出てくるのに、時間がかかった。玄関を開けたらすぐに対面できないところが、何とも心憎い。

家族は、ようやく一年ぶりに再会した。
アンズが出迎えて私に言う。

ア：君がねえ、一年前いなくなったとき、皆すごく幸せだったの。

今も幸せ気分だね。

母親が帰ってきて嬉しい気持ちが伝わる。本当にハッピーエンドだった。

一年かかって母親を許して再び迎え入れたアンズのドラマ。アンズのメタファーを使えば、ニンジンを食べ、生まれて初めてウンチがやっと出たのだという感じであっ

た。彼女の中にあってずっと表現できなかったものがここでひとつ大きく現れ出たのだろう。他の子どもも、そして浩二さん、私も、そのプロセスをともにした、という感覚を共有できた。

アンズの初めての「何が何でも、今日はやる！」という強いエネルギーと勢いだったので、時間オーバーであったが、最後までやって良かったと思う。

前号で、子どもたち、特にアンズの性的な言動について詳述したが、その収束傾向と反比例するように起きた、積極的なドラマ参加・感情表現の高まりが、非常に興味深く感じられた。

子どもたちの性的な言動は、生(ナマ)の、つまり本人の表層感情のままの発露であり、何かを創り上げるという感覚や意図は、当然なかったし感じられなかった。しかし、ドラマを創ることに入り込むことで、現実から想像の世界に入り始めた。想像とは、実は、今まで感じなかった、表現できなかったことを呼び起こし、感覚、感情の基盤が変化することでもあり、それが進行していたのだろう。表層の「性的」な言動より優勢な感情が出てきて、変容が進行したともいえる。

最後のお菓子タイム(シェアリング)のとき、たまたま私の分が足りないお菓子があったのだが、「明代さんのは?!」と言って、みんなが大変心配してくれた。自分の分があるかどうかだけに関心のある子どもたちだったはずなのだが・・・。アンズのドラマでみんなが感情を共有したことが、ここにつながったのではないだろうか。

(次号に続く)

-
- i Jennings, S. (Ed.).(1987).
Dramatherapy: Theory and
practice for teachers and clinicians.
Cambridge: Brookline Books.
 - ii Jung, C. (1964). Man and his
symbols. New York: Doubleday.
 - iii Campbell, J. (1988). The power of
myth. New York: Doubleday.